

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第797集

じ ろう まる たか いし
次郎丸高石 1

—次郎丸高石遺跡第5次調査報告—

2004

福岡市教育委員会

正誤表

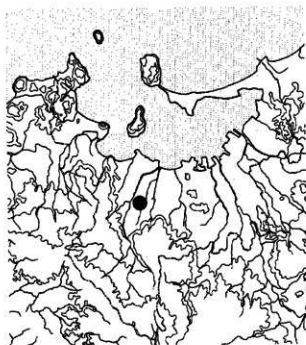
(福岡市埋蔵文化財調査報告書第797集『次郎丸高石1』2004)

頁	行	誤	正
はじめに	表(調査地番)	次郎丸6丁目470	次郎丸6丁目地内
6	5	円形あるいは楕円形状	円形あるいは楕円形状
9	20	南側(梁行)柱穴10-○+○±9	南側(梁行)柱穴10-○+○-9
"	23	柱穴2-1:2.2m	柱穴2-14:2.2m
"	26	柱穴4-5:2.2,2.4m	柱穴4-5:2.2,2.4m(重複する2基)
14	15	細粒流砂	細流砂
20	4	小穴出土遺物(図51)	小穴出土遺物(図52)
"	11	1区採集遺物(図51)	1区採集遺物(図52)
21	図52	[表題](1/1・3/3)	[表題](1/1・1/3)
裏表紙	抄録(遺跡名)	しもやまとおとめだいせき 下山門乙女田遺跡 第3次	じろうまるたかいしいせき 次郎丸高石遺跡 第5次
"	抄録(所在地)	西区下山門3丁目470	早良区次郎丸六丁目地内

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第797集

じ ろう まる たか いし
次郎丸高石 1

—次郎丸高石遺跡第5次調査報告—



2004

福岡市教育委員会

美穂町誌



1 1区全景（南から）



2 3区全景（南から）

序

福岡市内では約1,000箇所の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)が登録されており、いまなお新たな発見も続いています。開発などの行為により消滅する遺跡も数多くあります。早良平野の平坦な地形の下にも埋没しており、そのひとつが次郎丸高石遺跡です。

遺跡周辺は福岡都心部への通勤圏として宅地化が進行しています。前後して交通網の整備も着実に進んでいます。本書はその流れのなか、都市計画道路有田重留線建設に先立ち調査した、次郎丸高石遺跡第5次調査の成果を報告するものです。

福岡市教育委員会では、現状のままで保存できない遺跡について、原因となる工事等に先立ち、記録による保存のための発掘調査を実施しています。本地点の調査もそのひとつであり、本書によりその成果を公刊することとなりました。

ここに至るまでには、調査の準備から現場、整理作業の各段階関係各位の多大なご理解とご協力があつたことをここに記し、深くお礼申し上げます。

また、本書が、次郎丸高石遺跡についての理解を深めるための資料として活用されるところがあれば幸いといたします。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

はじめに

- 1 本書は、2002年度(平成14年度)、福岡市早良区次郎丸6丁目地内において、福岡市教育委員会がおこなった、次郎丸高石遺跡第5次発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査は、文化財保護法第57条の3による通知に基づき、福岡市土木局(西部建設1課)から福岡市教育委員会が依頼を受け、文化財部埋蔵文化財課が実施した。調査にあたって、福岡市土木局西部建設1課を始めとした関係各位から種々のご協力とご配慮を頂いた。この場で深く感謝申し上げます。
- 3 発掘調査は、表土掘取りを横山邦雄が、調査・整理・本書編集は、教育委員会文化財部埋蔵文化財課杉山富雄が担当した。
- 4 出土資料および調査記録は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理し、利用に供する予定である。

凡 例

- 1 次郎丸高石遺跡ではこの後調査、報告書刊行が継続すると予想されることから、書名を『次郎丸高石』とし、本書はその第1巻として刊行する。
- 2 位置の記録には、国土座標の値を利用した(日本測地系)。
- 3 図中に用いる方位は、国土座標の座標北であり、真北から0度19分西偏している。
- 4 遺物実測図は、特に記さないかぎり、縮尺3分の1で図示している。その外の縮尺の場合は、遺物番号に続けてそれを付記した。
- 5 報告中では、遺物、遺構に対して調査中の記録、整理作業に際して付した通し番号により表記し、これを登録番号とする。

調査番号	0209	遺跡略号	JRM-5
調査地番	福岡市早良区次郎丸6丁目470	分布地図番号	83(野芥)
工事面積	3,671㎡	調査対象面積	3,671㎡
調査実施面積	2,830㎡	調査期間	2002年4月15日～2002年7月16日

目次

I 次郎丸高石遺跡第5次調査の概要

1 調査に至る経過

埋蔵文化財事前審査・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

発掘調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2 発掘調査地点の立地と周辺の調査

次郎丸高石遺跡第5次調査地点の立地・・・・・・・・1

既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

次郎丸高石遺跡第1次調査・・・・・・・・・・・・・・3

次郎丸高石遺跡第2次調査・・・・・・・・・・・・・・3

次郎丸高石遺跡第3次調査・・・・・・・・・・・・・・4

3 発掘調査の経過と調査成果の概要

調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

調査成果の概要

1区の調査(巻頭図版、図5・6・7)・・・・・・・・・・5

2区の調査(図8・9・10)・・・・・・・・・・・・・・6

3区の調査(図11～14)・・・・・・・・・・・・・・6

II 次郎丸高石遺跡第5次調査出土の遺構と遺物

掘立柱建物1(図15・17)・・・・・・・・・・・・・・9

遺構18(図18・21・22)・・・・・・・・・・・・・・10

遺構19(図18・21)・・・・・・・・・・・・・・13

土壇21(図23・24)・・・・・・・・・・・・・・13

土壇22(図26・27)・・・・・・・・・・・・・・14

土壇25(図28・30)・・・・・・・・・・・・・・14

土壇39(図31・32)・・・・・・・・・・・・・・15

土壇40(図33・34)・・・・・・・・・・・・・・15

土壇41(図35・36)・・・・・・・・・・・・・・15

土壇46(図37・38)・・・・・・・・・・・・・・16

土壇47(図39・40)・・・・・・・・・・・・・・16

土壇61(図41・42)・・・・・・・・・・・・・・16

遺構62(図43)・・・・・・・・・・・・・・17

遺構65(図44)・・・・・・・・・・・・・・17

掘立柱建物74(図46・49)・・・・・・・・・・・・・・18

掘立柱建物75(図47・50)・・・・・・・・・・・・・・18

小穴・遺構外出土遺物(図51)・・・・・・・・・・・・20

1区採集遺物(図51)・・・・・・・・・・・・・・20

2区採集遺物(図51)・・・・・・・・・・・・・・20

III おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

挿図目次

巻頭図版 1 1区全景(南から)

巻頭図版 2 3区全景(南から)

図1 次郎丸高石遺跡の位置(1/50,000)……………1

図2 調査区の位置(1/5,000)……………1

図3 調査区(1/600)……………2

図4 1区(1/300)……………3

図5 1区小穴群の調査(西から)……………4

図6 1区土層(南から)……………4

図7 1区深掘り部土層(南から)……………4

図8 2区土層(南から)……………5

図9 2区全景(北から)……………5

図10 2区(1/300)……………6

図11 3区北部(北から)……………7

図12 3区北部(西から)……………7

図13 3区北壁土層(南から)……………7

図14 3区(1/300)……………8

図15 掘建柱建物1(1/80)……………9

図16 掘建柱建物1柱穴出土遺物(1/3)……………10

図17 掘建柱建物1(南から)……………10

図18 遺構18・19(1/40)……………10

図19 遺構19出土遺物(1/3)……………10

図20 遺構18出土遺物(1/3)……………11

図21 遺構18・19(北から)……………12

図22 遺構18下位の土器出土状況(北から)……………12

図23 土壌21(南から)……………12

図24 土壌21(1/40)……………13

図25 土壌21出土遺物(1/3)……………13

図26 土壌22(北から)……………14

図27 土壌22(1/40)……………14

図28 土壌25(1/40)……………14

図29 土壌25出土遺物(1/3)……………14

図30 土壌25(東から)……………15

図31 土壌39(1/40)……………15

図32 土壌39(北から)……………15

図33 土壌40(1/40)……………16

図34 土壌40(北から)……………16

図35 土壌41(1/40)……………16

図36 土壌41(北から)……………16

図37 土壌46(北から)……………17

図38 土壌46(1/40)……………17

図39 土壌47(1/40)……………17

図40 土壌47(北から)……………17

図41 土壌61(1/40)……………18

図42 土壌61(東から)……………18

図43 土壌62(1/40)……………18

図44 土壌65(1/40)……………18

図45 土壌65(東から)……………19

図46 掘建柱建物74(北から)……………19

図47 掘建柱建物75(東から)……………19

図48 掘建柱建物74(1/40)……………20

図49 掘建柱建物75出土遺物(1/3)……………20

図50 掘建柱建物75(1/40)……………20

図51 小穴・遺構外出土遺物(1/1・1/3)……………21

図24 土壌21(1/40)……………13

表目次

表1 報告遺物一覧 1……………22

表2 報告遺物一覧 2……………24

表3 遺構出土遺物観察表……………24

I 次郎丸高石遺跡第5次調査の概要

1 調査に至る経過

埋蔵文化財事前審査

福岡市教育委員会では、文化財保護法第57条の3に係わる事業について、事前に事業計画を把握し、埋蔵文化財保護のための調整を進めている。2001年11月1日付けで福岡市土木局(西部建設1課)から、早良区次郎丸6丁目地内における市道有田重留線道路改良事業計画地について、埋蔵文化財の有無確認の依頼があった。これを受けて埋蔵文化財課では、同年11月から2002年2月にかけて計画地の試掘調査を実施し、埋蔵文化財が遺存することを確認した。

埋蔵文化財課では、当該計画内容について現状での保存措置の検討を行った。しかし、工事計画の内容から地下の埋蔵文化財に対する影響は避けられないものと判断し、やむなく記録保存の措置をとることとした。

発掘調査

記録保存のための発掘調査は、土木局(西部建設1課)の依頼を受けて、福岡市教育委員会が実施することとなった。教育委員会では文化財部埋蔵文化財課を担当とし、2002年4月15日から次郎丸高石遺跡第5次調査として現場作業に着手した。発掘調査は、移転未了地、既存の生活道路などを除外した3,671m²を対象とした。最後の区画を終え、埋め戻し、外柵の撤去を行い、現場作業を完了したのは7月16日である。

調査面積は、周囲に引きを取り、また、水路を残置したことで2,830m²となった。

2 発掘調査地点の立地と周辺の調査 次郎丸高石遺跡第5次調査地点の立地

次郎丸高石遺跡は、早良平野の中央部に位置する。現況をみると、宅地造成盛土などで旧状を遺す部分はわずか水田のみである。水田の状況を見ると、遺跡及び近傍は早良平野の地形を受けて、ごく小さな勾配で北へ向かう緩斜面と



図1 次郎丸高石遺跡の位置(1/50,000)



図2 調査区の位置(1/5,000)

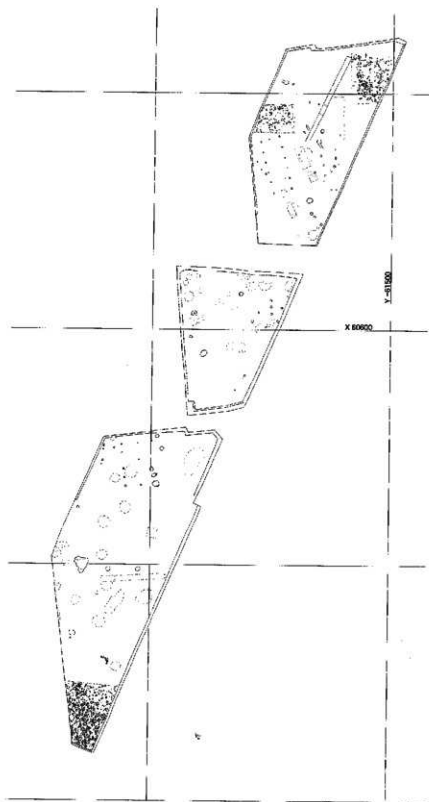


图3 研究区 (1/600)

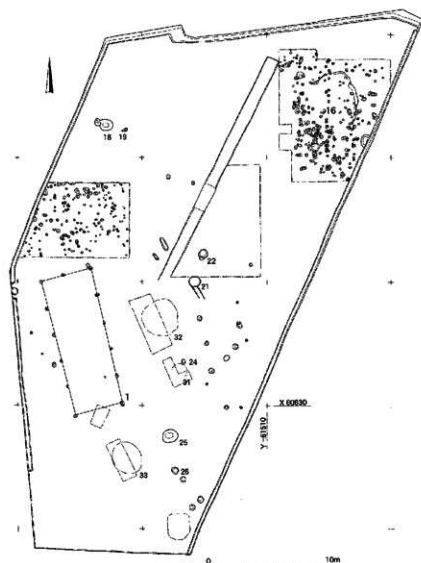


図4 1区(1/300)

なっている。また、周辺の小河川、水路も同様の方向に流れており、その間は微高地となる景観が推測できる。調査地の南端田面で標高12.7m、150m離れた北端田面で標高12.2mを測る。調査地の地盤は礫層が露出している。ただ、北端部は河川沿いの低地に位置するものか、現水田下に黒色のクロボク様の土壌が残っており、これが本来の地表面を示すものであろう。後述するように、この黒色土を掘り込んだ遺構があったことがわかる。

既往の調査

次郎丸高石遺跡第1次調査 調査地から200m北へ位置する。浅い谷を挟んだ地形の調査区で、縄文時代晩期、弥生時代、古墳時代の遺物が出土した。遺構には溝のほか、「不定形土壌」(おそらく風倒木痕)、ピット群などを調査した。¹⁾

次郎丸高石遺跡第2次調査 外環状道路建設に先立ち調査した。調査区中央が低く東西が高い地形で、比高は0.5~1mほどある。井戸、掘建柱建物、溝があったほかに、「土壌」、多数の



図5 1区小穴群の調査(西から)



図6 1区土層(南から)



図7 1区際張り部土層(南から)

柱穴、「足跡状遺構」が検出されている。^①

次郎丸高石遺跡第3次調査 第2次調査と同じく、外環状道路建設に先立ち調査した。標高9m前後の暗灰色・黒色火山灰層、シルト層の面で遺構を検出した。西側に寄って中世の建物群があった。遺物は縄文時代からの資料が出土している。^②

- (1) 松村道博 1981『福岡市次郎丸高石遺跡』『福岡市学校建設地内遺跡調査報告書～三筑遺跡・次郎丸高石遺跡～』福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集
- (2) 山口謙治 編 1996『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告1～福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡・次郎丸高石遺跡第2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第467集
- (3) 山口謙治 編 1997『福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告2～福岡市早良区賀茂所在次郎丸高石遺跡第3次調査・免遺跡第2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第536集

3発掘調査の経過と調査成果の概要

調査の経過

調査では、道水路が調査地を横断していることから、それによって対象地を3区分し、北から1、2、3区と設定した。調査は1区の表土鋤取りから着手し、次いで表土反転の都合などもあって、3区の南2/3部分に取りかかった。最後に、残土反転、表土鋤取りを行い、中央の2区および3区北部分へと作業を進めた。

調査成果の概要

調査区ごとに記述する。

1区の調査（巻頭図版、図5・6・7）ごく暖いが北向きの傾斜面に位置する。

遺構は南半部を中心に、散漫な分布である。弥生時代、古墳時代、平安時代の土壌である。掘建柱建造物1棟（掘建柱建造物1）を確認した。

また、井戸の可能性のある土壌も付近で検出した（土壌25）。北半部では、旧表土と思われる黒色土が残り、表土鋤取り時、層中で遺構を検出した（遺構18・19）。黒色土下には大小の落ち込みがあり、見た目は柱穴群のように見える。確認のため一部を掘り下げ、また



図8 2区土層（南から）



図9 2区全景（北から）

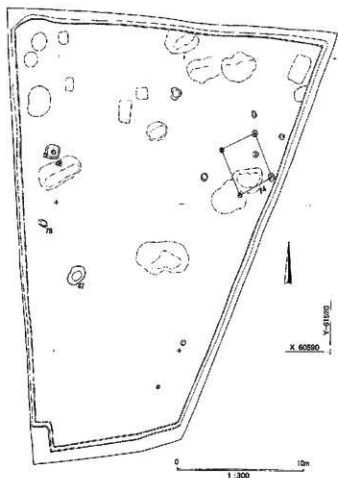


図10 2区 (1/300)

断面観察も行った(小穴群 図5・7)。断面では明確な曲形を確認できず底面の形状も不整である。覆土も一様で黒色土であることが多い。このことから、人為的なものでなく、植物の牛痕のようなものではないかと判断した。このような樹痕跡状の小穴群は、次郎丸高石遺跡野第1次調査、第3次調査地点でも見られる。遺物の出土は無い。1区のみならず、2・3区においても、いわゆる風倒木痕が分布する。平面形が円形あるいは随円形状を成す例が多く、黒色土で埋まり、その中に地山土が半月形に現れている。いま、これら痕跡が、風倒木であって、その覆土のうち、倒木が引き起こした地山土の示す三日月形の弦の部分が当時の地山面を示す線と考えるなら、樹木はほとんどが北西方向に倒れたこととなる。幾つかの例について、一部を掘り下げ、断面観察を行った。覆土中から遺物の出土はなかった。

2区の調査(図8・9・10)西に向かい、ごくわずかに傾斜する。礫層が露出している。部分的に柱穴が分布し、掘建柱建物1棟(掘建柱建物74)を復原したほかは、「土牆」が、西側に寄って分布していた。

3区の調査(図11・12・13・14)北端部に、柱穴が分布し、1棟の建物を復原した(掘建柱建物75)。



図11 3区北部（北から）



図12 3区北部（西から）



図13 3区北壁土層（南から）

南端部に1区と同様な樹痕跡状の小穴群が分布する。これが途切れる位置より北に風倒木痕が分布する。北半分には「土壌」が散在する。不整な形状だが、明らかに自然に埋没した例がある。遺物は全く出土しない。第3次地点で検出した例と同種のものと思われる。

遺構としては確認できないが、古墳時代の須恵器を極少量採集した。また、明らかに縄文時代のものとわかる、石鏃、剥片も1区から出土している。

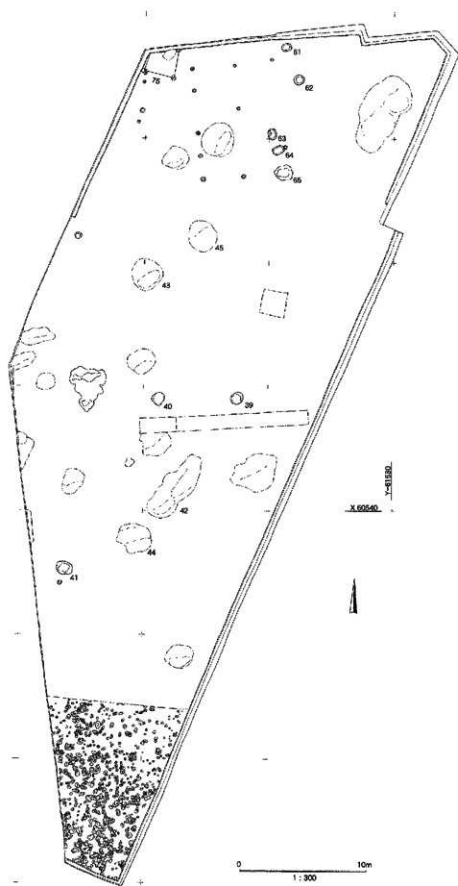


图14 3区 (1/300)

II 次郎丸高石遺跡第5次調査出土の遺構と遺物

以下、遺構番号順に記述する。

掘建柱建物1(図4・5・6・7)

1区、北向する緩斜面で検出した。平面形は梁行2×桁行5間の南北棟の建物である。

柱穴は小形で、径が0.2~0.3mの不整な円形または楕円形である。遺存深さは調査面から0.1~0.3mで浅く、南妻側の1基は試掘トレンチによって消滅している。

一部の柱穴には柱痕跡が残る。覆土は地山粘質・シルト塊を黒色土が充填している例が多い。柱痕跡は黒色土の例が多い。東側の柱穴4・5・9は、重複している。これらをつないでみると、わずかに振れる2条の柱列を復元することができ、建替えなどが行なわれた可能性がある。

平面での規模は両柱間の距離からすると、梁行4.0m、桁行11.2m程のものとなる。各柱穴間の中心間の距離は以下ようになる。

南側(梁行) 柱穴10-○+○+9 : 4.0m

北側(梁行) 柱穴2-3 : 1.8m, 柱穴3-4 : 2.3, 2.1m(重複する2基)

西側(桁行) 柱穴2-1 : 2.2m, 柱穴14-13 : 2.2m, 柱穴13-12 : 2.2m, 柱穴12-11 : 2.2m, 柱穴11-10 : 2.4m

東側(桁行) 柱穴4-5 : 2.2・2.4m, 柱穴5-6 : 2.3m, 柱穴6-7 : 2.4m, 柱穴7-8 : 2.2m, 柱穴8-9 : 2.2, 2.4m(重複する2基)

出土遺物(図16、表1)

5基の柱穴から遺物が出土した。それぞれ、ごく少量の出土で、ほとんどは弥生土器、古墳時代の土師器である。図示する25が、建物の時代に近いものか。土師器碗口縁部細片である。胎土は緻密で、内外面とも回転を利用した旗で調整である。

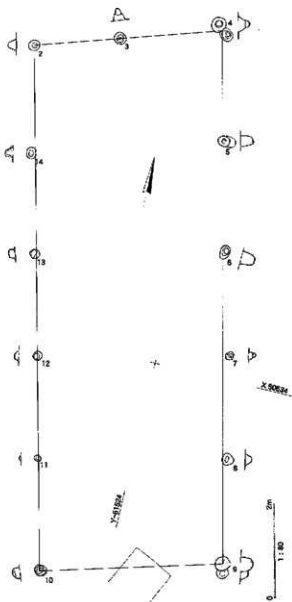


図15 掘建柱建物1 (1/80)



図16 掘建柱建物1-柱穴出土遺物 (1/3)

遺構18(図18・21・22)

1区の北面する緩斜面で検出した。黒色の旧表土が残る位置であり、表土剥ぎ時、黒色土中で土器が集中して出土したことで、確認できたものである。この部分のみ黒色土中位で残り、精査したが、黒色土中では掘形を検出できず、地山漸移層に至って、不整な楕円形の掘形を確認した。小穴と重複した状態で、断面では2段になっている。平面では1.0m、幅0.9m、深さは調査面から0.4mを測る。覆土は、表土層と同様の黒色土で中程以下では地山土の粒〜塊を含んでいる。

調査面より高い位置で土器が一括投棄されたような状態で密集して出土した。中には倒立した状態で置かれたあとで圧潰したことがわかるものがある(35)。

出土遺物(図20、表1)

遺物はコンテナ2/3ほどの分量が出土した。密集部からのものである。表土剥ぎ時に付近で採集した土器類の多くも、接合関係から本遺構のものであったことがわかる。遺物のほとんどは古墳時代前期の土器で、ごく少量弥生時代中期の土器片が混じる。

113は、長頸壺の口縁部で、胎土は緻密で細礫を含んでいる。

115は、短頸壺で外面は口縁に沿う方向に細幅の篋磨きを施す。胎土は緻密で器表は黄褐色を呈す。胎土の特徴などから台付壺116と同一個体の可能性がある。

111は高坏脚部である。軸部に上下方向にかすかに面取りの痕跡が残る。

47は甕で、断面は黒色、外面は口



図17 掘立柱建物1(南から)

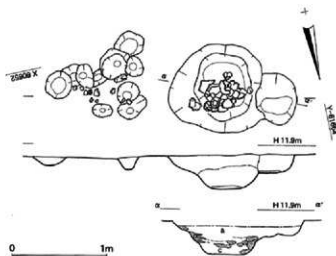


図18 遺構18・19(1/40)

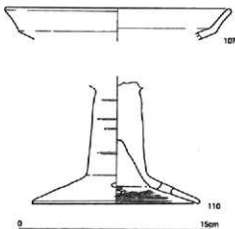


図19 遺構19出土遺物(1/3)

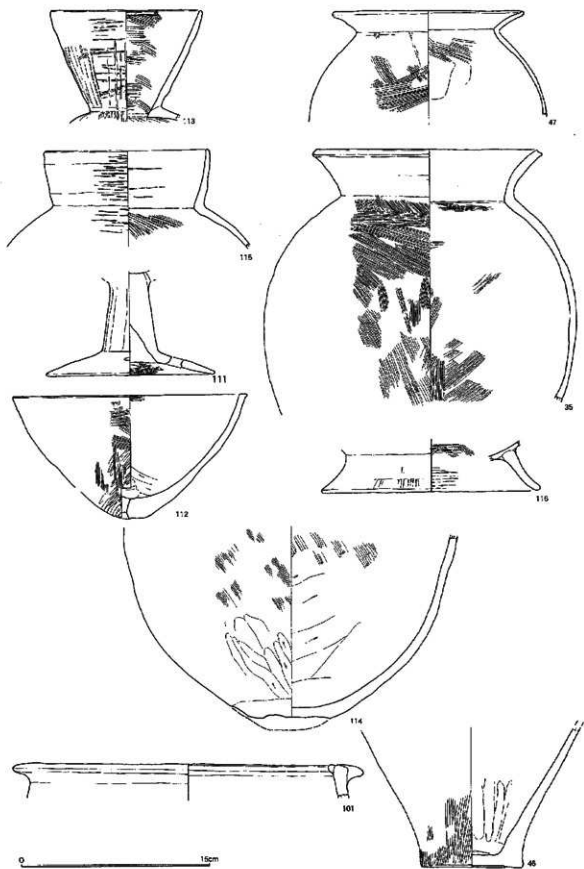


图20 透精18出土器物 (1/3)

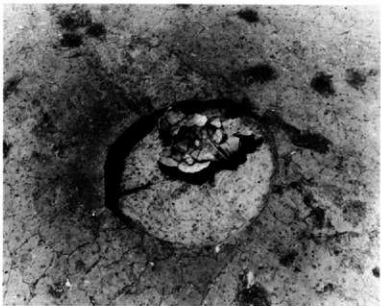
図21 遺構18・19（北から）



図22 遺構18下位の土層出土状況（北から）



図23 土層21（南から）



縁部付近まで煤状の付着物が残り、光沢をもつ。内面頸部近くまで篋削りを行なう。35は壺で外面の刷毛目調整は上は細目、下面是荒目である。

112は、甗、中心をはずれた位置に1孔を穿つ。下半部の外面には叩き目が残る。

114は壺下半部である。底部は剥落する。底部の内外面は篋削りを行なう。

101・46は弥生土器である。101は甕口縁部、46は甕底部である。

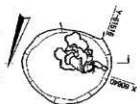


図24 土壙21 (1/40)

遺構 19(図 18・21)

遺構 18 に按じて土器集中部があり、これについて遺構 18 と同様に精査したが、明確な掘形は確認できなかった。土器群の下位に不整な小穴が密集するが、周辺で調査した樹根状の小穴群と変わるところがない。黒色土中に浅い掘形を持っていたものか。遺構 18 と一体であったものか。

出土遺物(図 19)

少量の出土である。土師器に少数の弥生土器が混じる。高坏を図示できる。107は坏部である。胎土はやや粗い。外面下半には刷毛目調整が残る。110は脚部である。軸部には回転方向の細目の篋磨きが行なわれる。

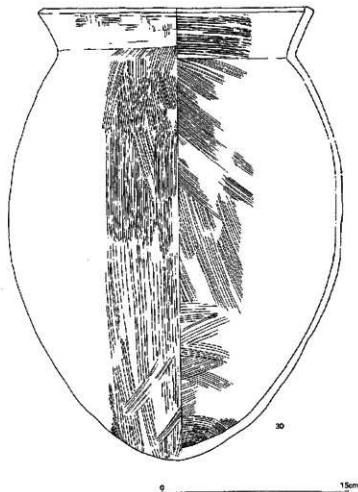


図25 土壙21 出土遺物 (1/3)

土壙 21(図 23・24)

1 区の遺構である。楕円形で浅い。断面は逆台形状である。長さ 1.9 m、幅 1.6 m、深さは 0.3 m を測る。覆土は黒色土である。底部近くで潰れた状態で土器が出土した。

出土遺物(図 25)

潰れた状態で出土した 1 個体の他は極少量の土器が出土したのみである。後期弥生土器細片が混じる。

30 は甗である。外面では口縁に沿う方向の粗い刷毛目調整後、縦方向の刷毛目調整を行う。体部下半ではささら状の工具を用いたものか。内面は不定方向の撫で調整を行なう。胎土には粗砂を顕著に含み、煤状の付着物のない内面では灰白色を呈す。口縁部径 22.0 cm、35.8 cm を測る。



図26 土壙22 (北から)

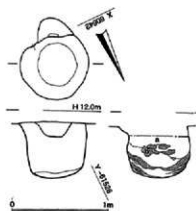


図27 土壙22 (1/40)

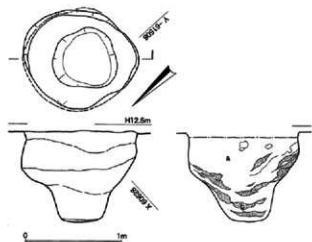


図28 土壙25 (1/40)

土壙22(図26・27)

1区緩斜面にかかる位置の遺構である。平面で円形、筒形の土壙である。覆土は黒色粘質土(a)で、中位に地山の鈍い黄褐色粘質土塊(b)を挟む。底部近くは、この地山土が水流により流れ込んだような薄層の堆積となる。

出土遺物 (図19)

遺物は覆土中からごく少量出土した。黒色土器の他は弥生時代中期・後期の土器が見られる。

104は黒色土器高台付碗底部細片である。内底面には磨きが残る。胎土は緻密で細粒流砂を含む。

器表は褐灰色を呈す。高台径6.63cmを測る。

土壙25 (図28・30)

1区南部の遺構である。平面では不整な楕円形状で、側面観は深い楕円状、中程が全周にわたり抉れている。覆土は黒褐色粘質土(a)で、底に向かって傾斜する地山土シルト塊(b)がレンズ状に挟まれている。底部は礫層に達し、拳大の礫が現れており、調査時はこの面から湧水を生じていた。しかし、壁面の抉れ部の位置からすると、かなり高い位置まで水位があったことが推測でき、井戸というべきか。平面の規模は長さ1.5m、幅1.1m、深さは1.0mを測る。

出土遺物 (図29)

遺物は覆土中から極少量が散漫に出土した。黒色土器の他、小形丸底壺の出土があった。

102は黒色土器碗下半部資料である。胎土はやや粒状性があり、内外面とも磨

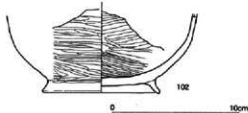


図29 土壙25出土遺物 (1/3)

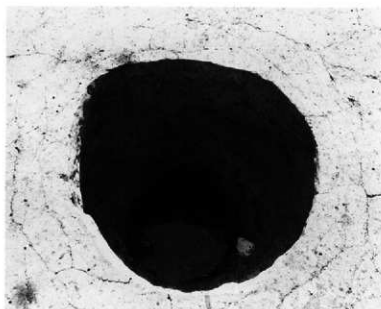


図30 土壌25 (東から)

磨きを施す。外面では口縁に平行して単位が断続する。内面では口縁に平行する単位で、区画毎に行なう。内外面とも焼しにより、にぶい光沢をもった黒色を呈す。高台部の復原径9.2cmを測る。

土壌39 (図31・32)

3区中央部に位置する。平面形は不整な楕円形状で、側面形は袋状を呈す。長さ1.1m、幅0.9m、深さ0.6mを測る。覆土は上部が赤黒色土(1・2層：遺構図中の土層番号、以下同じ)で、一部に褐色土を含む(1層)。下部では鈍い黄褐色粘質土の粒、塊が塊状に重なっている(3層)。壁面には縦方向にくぼみが多数生じており、樹根状を呈している。

覆土中から遺物は出土しなかった。

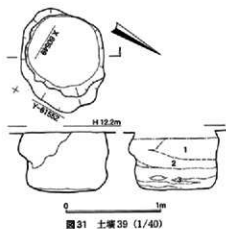


図31 土壌39 (1/40)

土壌40 (図33・34)

3区中央部に位置する。平面形は不整な楕円形状で、側面形は、底部近くが抉れて浅い袋状を呈す。長さ1.1m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。覆土は粘性のない赤黒色土でクロボク様である(2層)。最上部は黒褐色粘質土(1層)、底部は暗褐色粘質土(3層)である。抉れ部は暗褐色土の塊～粒で埋まる(4層)。

覆土中から拳大の礫が出土したが、遺物は出土しなかった。



図32 土壌39 (北から)

土壌41 (図35・36)

3区南部に位置する。平面形が不整な楕円形状、側面では皿状を呈す。長さ1.4m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。覆土は赤黒色粘質土で、黒褐色粘質土、褐色細砂が塊状に挟まれている。壁は不整で凹凸が顕著である。

覆土中から遺物は出土していない。

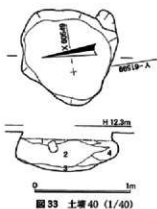


図33 土壕40 (1/40)

土壕46 (図37・38)

2区に位置する。平面形は不整な長方形状で断面形は上方が開く逆台形状を呈し、自然に崩壊埋没したような断面形を示す。しかし、覆土は黒色土で埋まっており、一様である。底面で小穴を検出した。覆土中から拳大の礫が出土した。

覆土中から遺物の出土はなかった。

土壕47 (図39・40)

2区に位置する。平面形は不整な楕円形状、断面形は完掘状態では袋状を呈するが、土層図は、壁際で落盤した地山土の間を黒色粘質土が埋めているような状態を示している。このためか、上部が陥没したように浅いくぼみとなって確認できた。

覆土中から遺物の出土はなかった。

土壕61 (図41・42)

3区北部に位置する。平面形が隅円長方形状を、断面形は袋状を呈す。確認面では不整な楕円形状を呈して輪郭が不鮮明で、樹根跡とするものと同様であったが、掘り下げ時の所見では壁を明確に認めることができた。長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.8

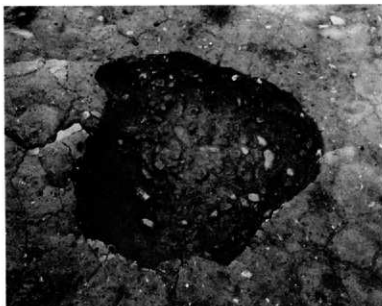


図34 土壕40 (北から)

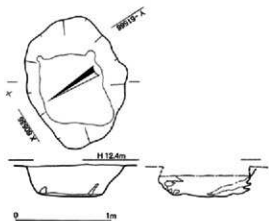


図35 土壕41 (1/40)

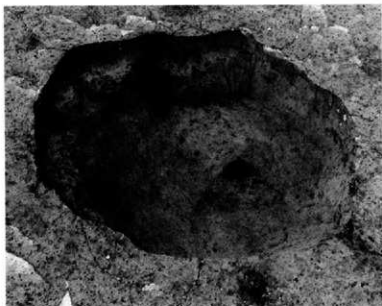


図36 土壕41 (北から)



図37 土壇46 (北から)



図38 土壇46 (1/40)

mを測る。覆土は上部が黒色粘質土(1層)、その上部は多孔質である。下部は黒褐色粘土(2層)、底部には暗褐色粘土混じりの粗砂(3層)が堆積している。

覆土中から遺物の出土はなかった。

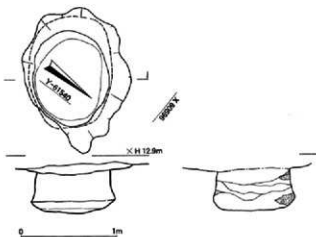


図39 土壇47 (1/40)

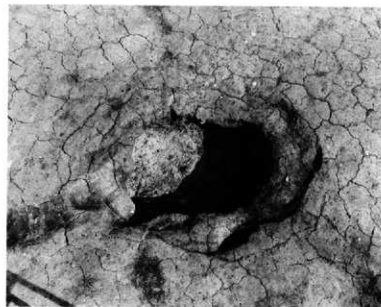


図40 土壇47 (北から)

遺構62 (図43)

3区北部に位置する。平面形円形、断面形が逆台形状の遺構である。覆土は黒褐色粘土(1~3層)、上部はよく締まり(1層)、中位では地山土塊を含む(2層)。底面には地山砂の流れ込みが見られる(4層)。覆土上部から弥生土器若しくは古墳時代の土師器かと見える

資料がごく少量出土したが、覆土からすると、明らかに近世かそれ以降のものである。

遺構65 (図44・45)

3区北部に位置する。平面形が不整な楕円形、断面形はフラスコ状で上部が漏斗状に開く形状である。長さ1.0m、幅0.6m、深さ1.0mを測る。覆土の上部は黒色粘土(1層)、中位では地山土である明褐色シルト粒(2層)が混じる。下部は明褐色シルトで、粗砂が混り締まりがない(3層)。覆土は壁

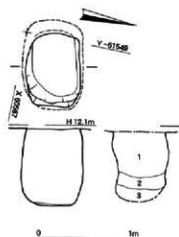


図41 土壙61 (1/40)



図42 土壙61 (見から)

側から傾斜するレンズ状の互層となつて堆積している。上部は肩部が崩れた状態を示し、開放された状態で埋没が進んだことを示している。

覆土中から遺物の出土はなかった。

掘建柱建物74 (図47・48)

2区で検出した柱穴から復原した。調査区内では1×1間を復原できる。柱穴は楕円形あるいは円形で、径が0.5～0.3m、深さが0.2～0.1m程の規模である。覆土は黒褐色土。柱間の距離は以下の通りである。

柱穴66-72: 3.2m、柱穴68-76: 3.4m、柱穴68-66: 2.8m、76-72: 2.8m

出土遺物 覆土から極少量の遺物が出土した。いずれも弥生土器の細片である。

掘建柱建物75 (図50・51)

3区で検出した柱穴から復原した。調査区外に柱穴1基を想定することで、1×1間の建物を復原できる。柱穴は不整な円形で、径が0.3～0.4m、深さは0.2mから0.3m程の規模である。覆土は黒色土で、2基では柱穴を確認した。柱間の距離は以下の通りである。

柱穴40-51: 2.8m、柱穴50-51: 2.2m。

出土遺物 (図49)

柱穴覆土から極少量の土器片が出土した。全て細片の資料で、弥生土器、古墳時代土師器が認められる。

118は土師器甕である。柱穴51から出土した。

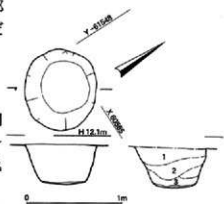


図43 土壙62 (1/40)

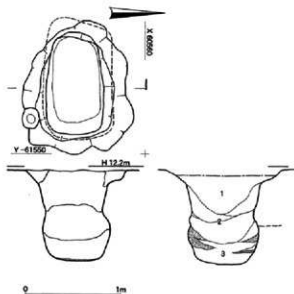


図44 土壙65 (1/40)

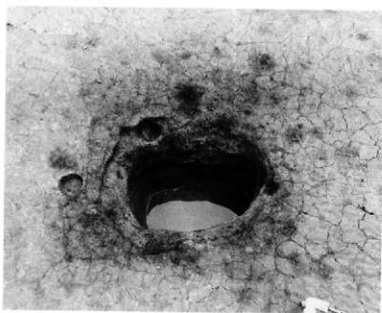


図45 土層65 (東から)



図46 建物74 (北から)

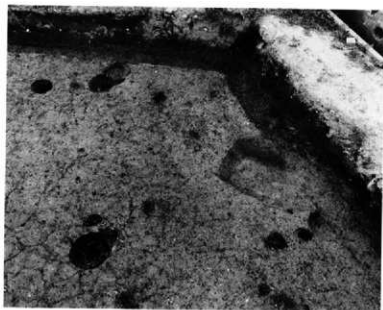


図47 建物75 (東から)

口縁内外面に刷毛目調整が行なわれる。頸部以下の内面は篋磨きが行なわれる。



図48 新築柱建物75出土遺物(1/3)

小穴出土遺物(図51)

117は弥生土器甕底部である。遺構20出土。

105は弥生土器甕口縁部である。遺構27出土。

106は弥生土器壺口縁部である。遺構27出土。

1区採集遺物(図51)

123は弥生土器甕底部である。

122は土師器台付鉢か、内底面に刷毛目調整が行なわれる。台部内面には刷毛目原体による圧痕が残る。

121・120は土師器高坏脚部である。脚部外面には縦方向の篋磨きが密に施される。内面では、くり抜きの篋削りが周回方向に粗く行われる。120は脚部外面には面が残る。篋削りを行ったものか。その後には周回方向の篋磨きを行なっている。内面にはくり抜き後指押さえを行なったものか。放射状に凹部が残っている。

5は有茎石鏃である。先端の一部を欠失する。黒耀石製。現状で長さ2.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm、重量1.4gを測る。

108・109は剥片である。いずれも黒耀石製。109はほぼ完存の資料である。打面は礫面でごく小さい。末端部の縁部に小剥離痕が連続する。108は上部を欠く。108は現況で長さ28m、重さ1.7g、109は長さ6.7cm、重さ4.4gをそれぞれ測る。

2区採集遺物(図7)

4は白磁玉縁碗口縁部である。

124は須恵器甕体部である。胴部;の径10.5cmを測る。胴部上半部に:回転削りを行なう。

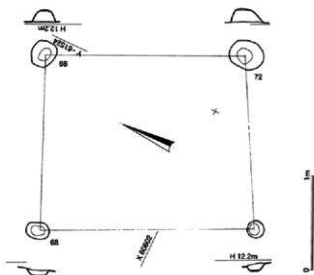


図49 独立柱建物74(1/60)

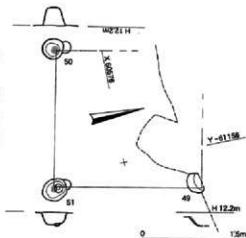


図50 独立柱建物75(1/60)

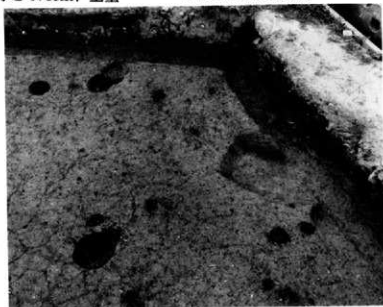


図51 独立柱建物75(東か6)

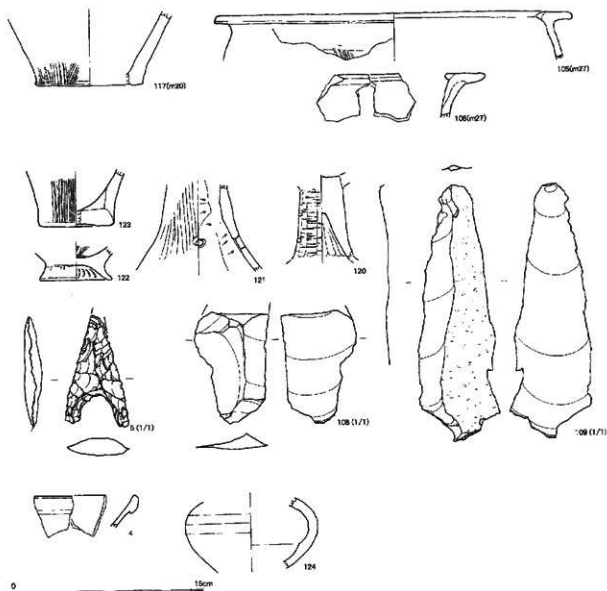


図52 小穴・遺構外出土遺物 (1/1・3/3)

Ⅲ おわりに

次郎丸高石遺跡第5次地点では、弥生時代終末期・古墳時代前期、平安時代の遺構が散漫に分布している。低地に向かう斜面部では黒色のクロボク様の上壤が保存され、それに掘り込みをもつ遺構が遺存する。また、縄文時代の遺物が散見されることは、この部分においてより古い時代の遺物の遺存の可能性も遺している。

平安時代とする建物は、周囲に柱穴と見られる遺構をほとんど分布せず単独で検出され、南方の田村遺跡などで見られた状況とよく一致している。

また、樹根跡状の小穴群、遺物を出土しない不整な土壌群といったものも第1次、3次地点で見られているように、かなり広い範囲に広がりを持っていることがわかる。それらについて自然科学的な分析も加えて、人為的な物であるかどうかということも含めて検討しなければならなかったが、今回は果たせなかった。次の機会での課題としたい。

遺物番号	出土遺物番号		遺物類別	器種	遺物特記	度量				
	出土区	出土部位				数量	口径	底径	器高	計測特記
						長さ	長さ	幅	高さ	
9	1	16	縄文土器?		体部の縮片で形状は不明。					
25	1	1	柱穴不明(東側列か)	土師器	碗					
30	1	21	一括採集	弥生土器	釜	終末期、体部中位の尖割	223	359		
35	1	18	壺? 上部	弥生土器?	壺	終末期(または古墳+ 尖割)	182			胴部径:24
46	1	18		弥生土器	壺	尖割			82	
47	1	18	墓中部南下部	土師器	壺	古墳時代前期	実径	156		
103	1	22	北平	弥生土器	碗					
104	1	22		黒色土器	碗	復元			66	
107	1	19		弥生土器	高坏	復元	179			
110	1	19	上層奥中部	土師器	高坏	尖割			129	
111	1	18		土師器	高坏	復原			134	
114	1	18	潰れた壺、上部	土師器	壺?	古墳時代前期、外面には縄の付着、底部では鬼面に被着胴部径:(現				
115	1	18	潰れた壺、上部	土師器	短頸壺	R116と同一体か、復元			131	
116	1	18	潰れた壺、上部	土師器	右付壺	R116と同一体か、尖割			178	
117	1	20		弥生土器	壺	復元			66	
102	1	25	西平	黒色土器	碗	復元			92	
101	1	27		弥生土器	壺	復元	252			
106	1	27		弥生土器	壺	復元				
118	2	51		弥生土器	壺	終末期?	復元	122		
119	2	67		弥生土器	高坏	終末期? 胴部幅の? 復元			286	
5	1			石器	石鏃	現況	24	12	4.14g	
101	1		表土剥ぎ時採取、黒色	弥生土器	壺	復元	276			
108	1		中央部断縁性の不整な	石器	剥片	現況	28		1.7g	
109	1		中央部断縁性の不整な	石器	剥片	現況	67		4.4g	
112	1		表土剥ぎ時採取、黒色	土師器	瓶	復元	185	96		
113	1		表土剥ぎ時採取、黒色	土師器	長頸壺	復元	120			

表1 報告遺物一覧1

特徴			
材質・粘土	色調・構成		意存量(群集)
	成形・調整の特徴		
粘土:緻密, 電砂砂を顕著に含む。緑孔多数あり, 繊維の痕跡と思われる。	器表: 荒れている。内面はにぶい黄褐色(10YR 6/6)		体形の極細片
粘土: 緻密で均質。	器表: 灰白色(10YR 8/2)	穴外面とも面輪で調整	口縁部の細片
粘土: 緻密, 粗粒砂を顕著に含む。	器表: 内面灰白色(5Y 8/2)	外面: 口縁に沿う方向の刷毛目調整(粗), 縦方向の刷毛目調整。体部下では彫刻の工具? 内面は不定方向の撫で調整。全体に塊状の付着物。	下半の一環を欠く
粘土: 緻密, 網織を含む。	器表: 黄褐色(10YR 8/4)	口縁部: 撫で調整。体部外面の上部は刷目の刷毛目調整(右斜め方向)。下部は粗目の刷毛目調整(上ドで短い単位)。内面は粗目の刷毛目調整(部分的に撫で調整)。	上半部
粘土: 緻密, 粗粒砂を顕著に含む。	器表: 淡黄褐色(10YR 8/4)	外面: 縦方向の刷毛目調整。内面: 底部近くの外壁までは指擦り。口縁部: 縦方向の撫で調整。体部外面: 上部は上下方向。下部は斜め方向の刷毛目調整。後に粗く撫で調整? 内面: 底部近くは粗く刷毛目調整。それより上は斜め方向で調整?	底部。器表の荒れが著しい。上半部の大破片(1/2)
粘土: 粗粒性あり, 粗粒砂を顕著に含む。	器表: 上ぼけ? 部分的に褐色(5YR 6/6)	口縁部: 口縁に沿って調整。底部下半外面: 縦方向の刷毛目調整。	口縁部の極細片。器表の荒れが著しい。口縁部の細片
粘土: 構目, 細粒砂を顕著に含む。	器表: 地灰色(10YR 4/1)	内面に指擦り	口縁部の細片
粘土: 粗粒性, 粗粒砂を含む。筋目: にぶい褐色(7.5YR 7/3)	器表: 褐色(2.5YR 6/6)	口縁部: 口縁に沿って調整。底部下半外面: 縦方向の刷毛目調整。筋部: 上半は横方向の磨き(棒状工具)。底部は外歪撫で調整。内面: 高縁方向で調整する刷毛目調整。	脚部(1/2)
粘土: 緻密, 少量の繊維を含む。	器表: 褐色(2.5YR 6/6)	筋部: 筋目は上下方向にかすかに面が残るところから。筋部方向で調整。潤面方向に撫で調整したもののみ。筋部の上半は撫で調整。下半は潤面方向に粗く調整する刷毛目調整。筋部の下半は上下方向の刷毛目調整(強い)撫で調整のようにも見える。それ以上には筋目の刷毛目調整(斜め, 上下)。内面: 幅広の筋部(強い)撫で調整(粗)。上部には粗目の刷毛目調整。	脚部(1/3)
粘土: 緻密, 粗粒砂を含む。	器表: 灰褐色(5Y 8/2)	外面: 口縁部から体部に至るまで潤面方向の磨き(棒状工具で)。内面: 口縁部: 潤面方向の撫で調整。体部: 斜めの刷毛目調整(外歪)。上下方向の刷毛目調整後、潤面方向の撫で調整。内部内面: 潤面方向の刷毛目調整。体部内面: 粗い刷毛目調整。	下半部(底部が脱落)
粘土: 緻密, 繊維を少量含む。	器表: 褐色(2.5YR 6/6)	外面: 口縁部から体部に至るまで潤面方向の磨き(棒状工具で)。内面: 口縁部: 潤面方向の撫で調整。体部: 斜めの刷毛目調整(外歪)。上下方向の刷毛目調整後、潤面方向の撫で調整。内部内面: 潤面方向の刷毛目調整。体部内面: 粗い刷毛目調整。	上半部の小破片(1/3)
粘土: 緻密, 粗粒砂を含む。	器表: 褐色(2.5YR 6/6)	外面: 口縁部から体部に至るまで潤面方向の磨き(棒状工具で)。内面: 口縁部: 潤面方向の撫で調整。体部: 斜めの刷毛目調整(外歪)。上下方向の刷毛目調整後、潤面方向の撫で調整。内部内面: 潤面方向の刷毛目調整。体部内面: 粗い刷毛目調整。	台部
粘土: 緻密, 粗粒砂を含む。	器表: にぶい褐色(5YR 7)	外面: 縦方向の刷毛目調整。内面: 器表が荒れて調整は自然としないが、指擦りさか。	底部の薄片
粘土: やや粒状性, 砂粒を少量含む。筋目: 地灰色(10YR 6/1)	内外面とも粗し(黒色, にぶい)	内面: 口縁部から体部に至るまで潤面方向の磨き(棒状工具で)。内面: 口縁部: 潤面方向の撫で調整。体部: 斜めの刷毛目調整(外歪)。上下方向の刷毛目調整後、潤面方向の撫で調整。内部内面: 潤面方向の刷毛目調整。体部内面: 粗い刷毛目調整。	下半部
粘土: やや粒状性, 粗粒砂を含む。	器表: にぶい褐色(7.5YR)	外面: 縦方向の刷毛目調整。口縁部は口縁にぶい撫で調整。	口縁部の細片
粘土: やや粒状性, 粗粒砂を含む。	器表: にぶい黄褐色(10Y)	内面: 口縁部から体部に至るまで潤面方向の磨き(棒状工具で)。内面: 口縁部: 潤面方向の撫で調整。体部: 斜めの刷毛目調整(外歪)。上下方向の刷毛目調整後、潤面方向の撫で調整。内部内面: 潤面方向の刷毛目調整。体部内面: 粗い刷毛目調整。	口縁部の極細片。器表の荒れが著しい。口縁部の細片
粘土: 緻密, 粗粒砂を含む。	器表: にぶい褐色(7.5YR)	外面: 縦方向の刷毛目調整。口縁部は口縁にぶい撫で調整。	口縁部の細片
粘土: 緻密, 粗粒砂を含む。	器表: にぶい黄褐色(10Y)	外面: 縦方向の刷毛目調整。口縁部は口縁にぶい撫で調整。	底部の粗片
器礫石		内面加工。0. 瓦類部に素材表面を残留。	先端部を欠く
粘土: 粗粒性, 粗粒砂を含む。	口縁上端から外面に上掘	口縁に沿って調整	口縁部の細片
黒曜石(磨石)			下半部
黒曜石(磨石)			尖角
粘土: 緻密, 粗粒砂を含む。	器表: 黄褐色(10YR 8/)	口縁上端部: 刷毛目調整。体部外面: 下2部は指擦り後、刷毛目調整。内面: 撫で調整後、下2部は指擦り。	上半部の大部分を欠く
粘土: 緻密, 網織を少量含む。	器表: 灰白色(10YR 8/2)	口縁部内面: 潤面方向の磨き(棒状工具で)。口縁部付近は撫で調整。口縁部内面: 斜め方向の刷毛目調整。体部内面: 潤面方向の指擦り。内面: 口縁部との接合部で指擦りえきが放射状に残る。調整には棒状の工具を使用する。	口縁部

遺物番号	出土遺物番号		遺物種別	器種	遺物特記	法長 取巻の程度			
	出土区	出土層位				口徑	長さ	底径 幅	器高 厚さ
120	1	表土剥ぎ時採集、黒色	土師器	高杯	古墳時代前期				
121	1	表土剥ぎ時採集、黒色	土師器	高杯	古墳時代前期				
122	1	表土剥ぎ時採集、黒色	土師器	有付保?	古墳時代前期?				
123	1	表土剥ぎ時採集、黒色	赤生土器	夾	中期				
4	2	採集	白磁	碗	大 古墳時代後期				
124	2	表土剥ぎ(北水溝付近)	刺意器	屋	古墳時代後期				

表2 報告遺物一覧2

調査年度	遺物番号	出土区	出土層位	遺物種別	器種	遺物特記	法長 取巻の程度				計測特記
							口徑	長さ	底径 幅	器高 厚さ	
1980年度	120	1	表土剥ぎ時採集、黒色	土師器	高杯	古墳時代前期					
1980年度	121	1	表土剥ぎ時採集、黒色	土師器	高杯	古墳時代前期					
1980年度	122	1	表土剥ぎ時採集、黒色	土師器	有付保?	古墳時代前期?					
1980年度	123	1	表土剥ぎ時採集、黒色	赤生土器	夾	中期					
1980年度	4	2	採集	白磁	碗	大 古墳時代後期					
1980年度	124	2	表土剥ぎ(北水溝付近)	刺意器	屋	古墳時代後期					

表3 遺構出土遺物観察表

抄録

書名	じろうまるたかいし 次郎丸高石
副書名	次郎丸高石遺跡第5次調査報告
巻次	1
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	797
編著者名	杉山富雄
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	20040331
作成法人ID	
郵便番号	810-8621
電話番号	092-711 4667
住所	福岡市中央区天神1丁目8番1号
遺跡名	しもやまとおとめだいせき 下山門乙女田遺跡 第3次 ふくおかしにしくもやまと3ちょうめ470
遺跡所在地	福岡市西区下山門3丁目470
市町村コード	40137
遺跡番号	2447
北緯	333241 (日本測地系)
東経	1302015 ()
調査期間	20020416～20020716
調査面積	2830
調査原因	道路建設
種別	散布地/集落
主な時代	鎌倉時代/室町時代
遺跡概要	集落-弥生終末～古墳 土壇2-弥生土器・土師器/集落-平安-掘立柱建物1+井戸1/散布地-縄文・弥生 -?-石畿+弥生土器
特記事項	
備考	

じろうまるたかいし
次郎丸高石 1

一次郎丸高石遺跡第5次調査報告一
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第797集

2004年3月31日

編集・発行 福岡市教育委員会

印刷 有限会社光文堂

福岡市博多区東比恵4-5-4